

聖公会では聖餐式の中で、「キリエ」を唱えます。キリエの中の「キリエ・エレイソン」は、「主よ、憐れみをお与えください」と現在の祈祷書の中では訳されています。今回はこの「憐れみ」という言葉について、考えてみたいと思います。

さて、「憐れみ」と聞くと、皆さんはどのようなイメージを持たれるでしょうか。一般的な辞書で調べてみますと、不憫に思う、同情する、気の毒に思う、慈悲の心をかける、恵むといった意味が書かれています。聖書の中でも、そのような意味で用いられていることもあります。誰か他の人が悪い状況を目の前にしているのを見たときに、心の中に抱く同情という感じでしょうか。しかしそれに加えて、特に共観福音書においては、心情だけではなくて行為としても用いられていることが多いようです。

例えば、右の聖書の箇所を見てみたいと思います。マタイによる福音書の中で二人の人がイエス様に言っている場面です。「わたしたちを憐れんでください」。ここでは「憐れんでください」と訳されていますが、原文では命令形(エレイソン)になっています。つまりすこし乱暴ですが、「わたしたちを憐れめ！」と言っていると考えてもよいのです。また彼らが求めたのは、イエス様は「かわいそうに」と同情するだけではなくて、実際に彼らに対してふるまうことなのです。

わたしたちにも、他者に対する憐みを、行いをもって示すようにとイエス様は言われます。善きサマリア人のたとえ(ルカ 10:25~37)などをみても、そのことがわかります。

わたしたちが隣にいる人に対して憐れみをもって接するのは、わたしたちがまず神さまから憐れんでいただいたからです。その憐みとは、マリアの賛歌(ルカ 1:46~56)やザカリアの預言(ルカ 1:67~80)にもあるイエス様の誕生なのです。

次回は「按手」です。お楽しみに。



「盲人の目を開かせるイエス」

ドゥッチョ・ディ・ブオンセーニャ (1278-1318)

群衆は叱りつけて黙らせようとしたが、二人はますます、「主よ、ダビデの子よ、わたしたちを憐れんでください」と叫んだ。

(マタイによる福音書 20 章 31 節)

